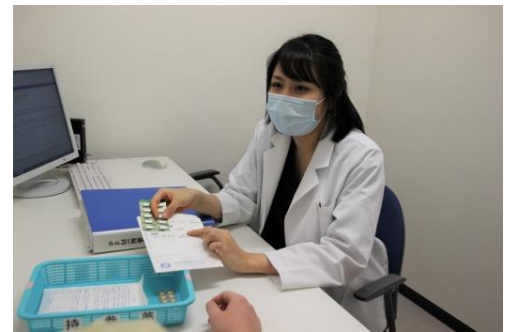


職員の声 尼崎総合医療センター 薬剤部

当センターは、平成 29 年度 4 月より PFM と呼ばれる取り組みを開始しました。今回は当センターにおける PFM の取り組みと薬剤師の役割をご紹介します。

●PFM とは

Patient Flow Management の略で病院全体として患者さんの入院から退院までをスムーズにするための取り組みです。入院が決定した患者さんは入院前に面談を受けます。現在薬剤師は 1 日平均 10 人の患者さんと面談し、持参薬確認を行っています。その面談の中で、患者さんの常用薬の用法用量の聞き取り、自宅でのコンプライアンスの評価、薬剤アレルギーの有無、健康食品やサプリメント服用の有無についての聞き取りなどを行っています。また、手術目的に入院される患者さんについては、術前に休薬が必要な抗凝固薬や抗血小板薬を服用していないか確認し、中止が必要な薬剤がある場合は主治医に情報提供を行い、患者さんが適切に手術を受けることができるよう支援しています。また入院前に面談し、得た情報を病棟薬剤師に伝えることで病棟業務の充実を図っています。更に薬剤アレルギー等の情報を事前に把握することで、入院中に患者さんに適切な薬剤を投与することができます。



●PFM 業務を通じて

私は 5 年目の職員ですが、このような病院全体での新しい取り組みにおける薬剤部の運用決定の仕事を任せてもらっています。病院として前例のない新しい取り組みを決定することは困難もたくさんありますが、実績がどんどん伸びてくるたびに達成感を感じることができています。当院は若手職員が多く、若い頃から様々な仕事に携わることができ、知識や経験の向上に繋がっています。

兵庫県立病院には 5 つの総合病院と 5 つの専門病院があります。それぞれの病院には特色があり、薬剤師としての専門性を活かして成長できる環境があります！みなさんも県職員の一員となり、私たちと一緒に県立病院で働いてみませんか？



職員の声:加古川医療センター薬剤部



骨粗鬆症は加齢や薬の影響などで骨がもろくなってしまう病気のことです。一般の若い年齢の人では考えられないようなちょっとした衝撃だけでも骨折してしまうようになります。骨粗鬆症の高齢者にいたっては、骨折が原因で寝たきり状態になってしまうことも少なくありません。そういった背景から超高齢化社会を迎える今後、骨粗鬆症マネージャーの存在は重要になってくるものと思われます。私は昨年11月の認定試験に合格し、骨粗鬆症マネージャーの認定資格を持った薬剤師として日々業務に励んでいます。今回は、当院における薬剤師の骨粗鬆症マネージャーとしての取り組みについてご紹介します

骨粗鬆症マネージャーとは？

骨粗鬆症マネージャーとは、「骨粗鬆症領域における基本知識と技能」を習得したスタッフのことをいいます。この資格は一般社団法人日本骨粗鬆症学会の認定資格で、骨粗鬆症の予防、診断、治療、骨粗鬆症予防のための啓発活動、健康格差の縮小や健康寿命を伸ばすことなど、骨粗鬆症にまつわるあらゆることについて学び活動していきます。現在、看護師、理学療法士、薬剤師、放射線技師、管理栄養士等の職種の約2500人が骨粗鬆症マネージャーとして活躍しています。

整形外科病棟における薬剤師の骨粗鬆症マネージャーとしての役割

①骨粗鬆症治療歴の確認

当院の整形外科病棟に入院される患者さんのうち、脆弱骨折（胸・腰椎圧迫骨折、大腿骨頸部骨折、大腿骨転子部骨折）の治療目的で入院された患者さんに対して骨粗鬆症治療介入の有無について聞き取りを行います。骨粗鬆症の治療が開始されていない患者さんに関しては医師と相談し、薬物療法について介入を行います。

②処方された薬剤の説明

医師から処方された薬剤（ビスホスホネート薬、抗RANKL抗体製剤、副甲状腺ホルモン製剤等）について薬剤指導を行います。使用する薬剤の薬理効果や投与期間、投与間隔、副作用、その他の注意すべき事項等について患者さんやご家族に説明します。

③副作用出現の有無を確認

開始された薬剤について、副作用が出現していないか、患者さんからの聞き取りや検査値等から確認します。

記載した病棟での業務の他にも、県民フォーラムや院内で開催される勉強会で骨粗鬆症に関する講義を行っています。

骨粗鬆症は骨折をするだけでなく、生活や人生を変えてしまう可能性のあるものです。骨粗鬆症マネージャーは、介護が必要な生活を予防するために患者さんやご家族、また社会全体へ働きかける役割を担う資格でもあります。今後も薬による治療を安心して継続できるように関わっていきたいと思います。

職員の声 淡路医療センター薬剤部

淡路医療センターは、淡路島の中核病院でありがん診療連携拠点病院としてがん診療など高度専門医療の充実を掲げています。今回は、当院の抗がん剤業務についてご紹介したいと思います。



抗がん剤業務について

当院では抗がん剤調製業務を入院・外来共に薬剤部が行っています。調製だけでなく医師がオーダーしたレジメン指示書を確認し、患者に適応するがん種であるか、前回投与時との制吐薬、抗がん剤の用法用量に違いはないか、副作用による減量の必要性の確認をしています。初回の注射抗がん剤を使用する患者に対しては、薬剤師による初回指導を行っています。最近では、外来で初回投与を行うことも多く、持参薬との相互作用や自宅での過ごし方、副作用対策について指導を行っています。また、今年度より、抗がん剤調製時における曝露を減らすため、閉鎖式接続調製器具（以下 CSTD : closed system drug transfer device）を導入しました。

CSTD と職業性曝露について

現在、患者だけでなく、医療従事者に対する抗がん剤による職業性曝露が問題視されています。従来の金属針を用いて調製した場合や患者への投与時には、バイアル内からのエアロゾル発生、ルート接続部からの液漏れ、輸液セット抜き差し時の液漏れ、廃棄された器具からの液漏れなどから曝露の危険性があります。CSTD を導入することで、患者及び医療従事者への抗がん剤曝露を防ぐことが出来ます。CSTD とは、外部の汚染物質がシステム内に混入することを防ぐと同時に、液状あるいは気化された薬剤がシステム外へ漏出することを防ぐ構造を有する器具をいいます。



抗がん剤は目に触れないところで曝露することもあるため、CSTD を用いて安心安全にがん化学療法を実施しています。

兵庫県立病院は、専門病院や総合病院といった病院毎で特色が異なるため薬剤師として様々な経験を学べる環境にあります。
皆さんも県職員の一員となり、私たちと一緒に働いてみませんか？

職員の声

兵庫県立こども病院 薬剤部

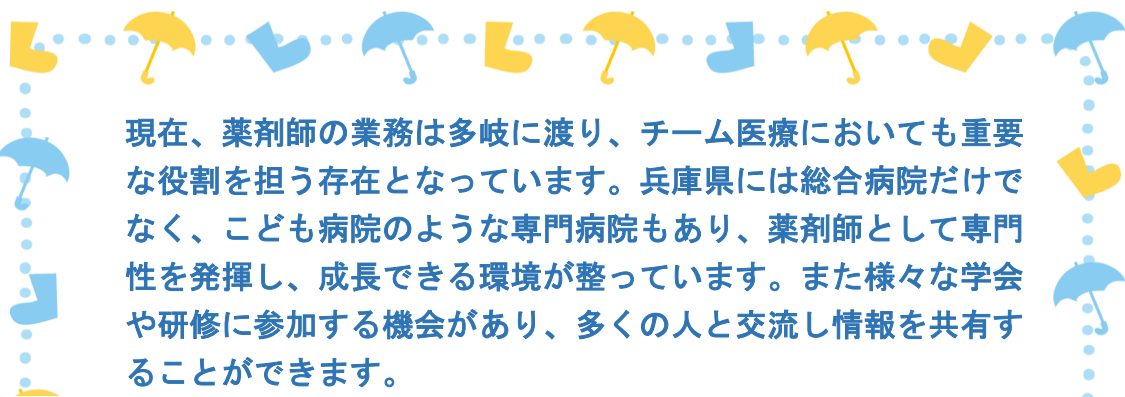
2017年4月に兵庫県立こども病院で薬剤師として採用されて、2年が経とうとしています。

今回は私が担当しているASTでの業務についてご紹介します。



ASTとは抗菌薬適正使用支援チームの略称で、抗菌薬を正しく使用する手助けをするチームです。このチームが目指すのは、抗菌薬の正しい使い方による治療効果の向上や有害事象を最小限にとどめることだけでなく、耐性菌の増加を防ぐことです。

当院では、薬剤師がチームリーダーとなり薬剤師主導型の症例カンファレンスを週3回、感染症内科医と行っています。対象となるのは、抗緑膿菌薬使用、血液培養陽性、14日以上抗菌薬を使用している患者です。カンファレンス開始以降、感染症治療の適正化が図れるとともに、抗菌薬の投与期間短縮や処方量削減等にも繋がっています。また、私達薬剤師もカンファレンスを行うことで、感染症に対する関心が高まり、知識を深めることができます。



現在、薬剤師の業務は多岐に渡り、チーム医療においても重要な役割を担う存在となっています。兵庫県には総合病院だけでなく、こども病院のような専門病院もあり、薬剤師として専門性を発揮し、成長できる環境が整っています。また様々な学会や研修に参加する機会があり、多くの人と交流し情報を共有することができます。



みなさんも是非、私たちと一緒に県立病院で働いてみませんか？

